

授業科目名 <英訳>	漢文学Ⅰ The Chinese Classics I		担当者所属 職名・氏名	人文科学研究所 教授 矢木 毅			
群	人文・社会科学科目群	分野(分類)	芸術・文学・言語(基礎)		使用言語	日本語	
旧群	A群	単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	講義
開講年度・ 開講期	2018・前期	曜時限	月2	配当学年	全回生	対象学生	全学向

[授業の概要・目的]

朝鮮王朝時代に編纂された『龍飛御天歌』を読む。

『龍飛御天歌』は中国・朝鮮における歴代帝王の功績を讃えた頌歌。ハングルの「歌」と漢文の「詩」とから成り、その内容を説明するための「註解」と「音訓」を付す。授業で取り上げるのは主として註解の部分。朝鮮典籍といってもハングルではなく、純然たる漢文体の著作であるのご安心いただきたい。

註解の内容は、基本的には有名な司馬光『資治通鑑』のダイジェスト版である。しかしこれには独自に小註（音訓）が付されているので、これらの小註についてもなるべく丁寧に読み進めていきたい。

テキストの本文には句読が付されており、要所要所には漢字の声調（四声）を示す記号（圈発）が付されている。さらに小註では漢字の発音（反切）が示されるとともに、読解に際して間違いやすいところ、注意すべきところ、および人名・職官・地理などに関する基本情報が、実に丁寧に説明されている。この小註を通して漢文の基礎、延いては歴史書の読み方についても学んでほしい。

[到達目標]

高等学校で学んだ漢文の知識を基礎として、さらに「白文」による学習に取り組み、訓点に頼らずとも漢文の史料が読めるようになる。また漢文史料の詳細な読解を通して、中国・朝鮮の躍動感あふれる歴史記述を独力で読み進めることができるようになる。

[授業計画と内容]

全125章のうち、当面、第58章（唐太宗）から読み進める。進度は受講生諸君の取り組み次第。第1週に『龍飛御天歌』の概略を説明し、第2週～第14週において講読形式によりテキストの読解を進める。

第1週 『龍飛御天歌』解説

第2週～第14週 『龍飛御天歌』第58章の講読。読了後は適宜、他の章に進む。

毎回、受講生はテキストの訓読を担当し、それを受けて講師が詳細に解説する。

[履修要件]

高等学校における漢文の教科の基本的な知識を身に着けていることが望ましい。

漢文学Ⅰ(2)

[成績評価の方法・観点及び達成度]

- (1) 75パーセント以上の出席を要求する。
- (2) 出席要件を満たす者について、定期試験の成績により評価を行う。
- (3) 定期試験では講読したテキストの範囲内において、常用漢字の書き取り、漢文の書き下し、並びに現代語による解釈等について出題する。

[教科書]

プリントを配布する。

[参考書等]

(参考書)

宮崎市定『大唐帝国』（中央公論新社）ISBN:9784122015463（授業では直接取り上げないが、関連書籍として推薦する。）

吉川幸次郎『漢文の話』（筑摩書房）ISBN:9784480090270（授業では直接取り上げないが、関連書籍として推薦する。）

前野直彬『漢文入門』（筑摩書房）ISBN:9784480097095（授業では直接取り上げないが、関連書籍として推薦する。）

(関連URL)

<http://www.library.pref.osaka.jp/site/oec/index.html>(大阪府立図書館「おおさかeコレクション」では、『龍飛御天歌(順治本)』の全文画像が閲覧できる。適宜、参照していただきたい。)

[授業外学習(予習・復習)等]

角川書店『新字源』、またはそれと同水準の漢和辞典(書籍版)を常に手元において学習すること。また、漢和辞典の附録(特に助字や句法の解説)についても通読しておくこと。

[その他(オフィスアワー等)]

受講生による講読(発表)の機会を確保するために、受入(予定)人数は20名までに制限したい(人数が超過する場合は抽籤)。

漢文の修得に王道はない。この授業を通して助字の用法、および漢文の句法について習熟し、独力で「白文」が読めるようになることを期待する。